



かしま友愛

第21号

2012年1月25日

社会福祉法人
加島友愛会事務局
大阪市淀川区加島1-60-36

☎ 06-6101-6601

レインボープランの推進を

理事長 平田 純博



護事業『リュミエール加島』がオープンします。知的障害者の新たなグループホームは新年度に建設を予定し、建替え予定の市営住宅内グループホームも別の住宅への移転の目途がたちました。周辺地域のご理解ご支援に厚くお礼申し上げます。

新年度も、社会福祉レインボープランを始め高齢者・障害者など地域の福祉増進をめざし努めたいと決意しております。

皆様のご支援ご協力を、本年もどうかよろしくお願いいたします。

年が改まって、初めての「かしま友愛」の発行にあたり、ご挨拶申し上げます。

昨年は、東日本大震災が発生し、津波により多くの人々の生命や生活が奪われ、そこへ原発事故による被災が重なるという未曾有の悲劇が起こりました。

加島友愛会としては、義援金募金、介護用品等救援物資、被災地の障害者支援のための職員派遣などにとりくみました。

加島友愛会のレインボープラン第一期は、この四月には介護付き有料老人ホーム・小規模多機能型居宅介



▲リュミエール加島の工事も順調に進んでいる（1月初旬撮影）

コラム

かしまの光

昨年十一月に大阪市長と大阪府知事のダブル選挙がおこなわれた。

結果は周知のとおり大阪維新の会の候補者の圧勝となったが、注目すべきは投票率の高さである▼市長選挙では、前回よりも十七ポイント上回り四十年ぶりとなる六十%超えを記録した。関心の高さがかがわれた▼とくに「若者の投票行動が投票率アップに反映した」と分析された。「政治離れ、無関心」が言われて久しいが、今回は今までとちがう「期待感」があったにちがいない▼超高齢化社会へとすすむ日本や地域の将来を見据える一票を投じる機会がこれからも訪れる▼今年には国政選挙があるかもしれない。一過性の投票率アップにせず社会や政治への関心を高めるために、成人（政治）教育が必要ではないだろうか。



二〇一一年の加島友愛会
写真で見る



◀各施設の取り組みを発表

第2回現場実践交流会 [2/26]



◀救援物資・義援金活動とともに職員を派遣

東北の被災地への支援



[5/16]

リュミエール加島地鎮祭



[7/23]

障害者センター夕涼み会



◀各施設の主任が一堂に会して人事評価制度を学ぶ

主任研修 [8/23]



◀十七年目の息の長い交流に

稲刈り [10/16]

加島・三津屋地区研究集会
第6分科会の開催について

日時 2月19日(日) 午前10時
場所 市民交流センターよどがわ
淀川区加島1-58 ☎ 06-6309-2255
内容 『被災地における障がい者の支援』
講師 八幡 隆司さん(NPOゆめ風基金理事)

加島友愛会の取り組みの報告

参加費 無料

例年春に実施していました
加島友愛会主催の実践交流会
は、今年は夏に実施します。

理事会・評議員会を開催

十二月三日、加島友愛会の理事
会・評議員会が開催されまし
た。

今年度上半期の事業報告、補
正予算案、リュミエール加島の
進捗状況、グループホーム建設
計画などの議案が提案され、承
認されました。

議事後、九月に実施された
スウェーデン視察研修の報告が
おこなわれました。法人創立二

十周年を記念して実施されたこ
の視察には、女性職員三人が参
加しました。
(六面参照)



私にとって 仕事のやりがいとは②

特集



アンダンテ加島
有森大介
(写真中央)

アンダンテ加島は多くの利用者が入所されており、24時間サポートするため多くのスタッフが勤めています。様々な人間関係が存在し、スタッフ間の連携も欠かせません。

障害があるために言葉が話せない方や言葉が話せても想いを上手く伝えられない方が多数います。利用者の様子を注意深く観察し、想いを汲み取り対応できた時は利用者も表情良く過ごすことができ、その時は支援者として嬉しくなるし元気をもらえます。

積極的に関わる中で、新たな発見や関わり方にも工夫が生まれより良い支援ができると思います。人との関わりを主とする仕事ですので、今後も仕事の忙しさを言い訳にせず、一つ一つの関わりを大切に、利用者にとって楽しい生活の場と感じてもらえるように頑張りたいと思います。



加島希望の家
数下卓也

私の担当しているグループは自閉症の方のグループです。グループのみなさんは「ことば」のコミュニケーションが苦手な方や、表現の方法が独特な方、かたよった言葉で話す方、中には言葉自体を持たない方もいます。

その中でも、どれだけ利用者さんの可能性を引き出せるか、どれだけ利用者さんのことを理解できるかを考えながら支援を行っています。そしてその人らしさを大切に、その人の人生が豊かになればいいなと思っています。その豊かさに少しでも自分が関わることができればすばらしいことだと思うし、やりがいはそういったところにあるのではないかと思います。



地域生活支援部
山本由香里
(写真左)

「今日な、カーテン頑張ってんー！」…玄関の向こうから、元気な声が聞こえる。日中施設で取り組んだ作業の内容がいち早く分かります。玄関チャイムの音と「ゆかりさーん、ただいまー！」の声に、私は「おかえり」と迎え入れる。夕暮れ時、グループホームに帰ってくる入居者とのやりとりから、賑やかな一日が始まります。

その後、順次入居者が日中施設や就労先より帰ってきますが、入居者それぞれの「ただいま」「おかえり」があります。私は一人暮らしをしているので、普段は「ただいま」や「おかえり」のやりとりをすることがありません。世話人にとっては仕事であると同時に、家の中で人と過ごし、一緒に食事をしながら会話を楽しむといった貴重な時間でもあるのです。何気ないやりとりの中に、家庭のような温かみを感じます。それらが日々のやりがいにつながっています。



加寿苑
武内恭祐

私にとっての仕事のやりがいは、「入所者の笑顔、喜んでいる姿をみること」「ありがとう」と言ってもらえることです。日々の生活の中で、ただ生活をしてもらうのではなく、一日一日がその人にとって充実したものになるよう、入所者とコミュニケーションを図り、観察しながら取組みをしています。

自分の中で「この人にはこれが一番だ」と無理に押しつけて失敗したこともありましたが、それでは入所者のためではなく、「ただの自分の思い」です。そうではなく、家族と情報交換し他の職員の意見を取り入れ、検討することがその人にとって一番大切だと理解できるようになってきました。

入所者の思いを汲み取り、日々充実して楽しんで生活していただくことが、私にとっての一番の仕事のやりがいです。

昨年度につづき加島友愛会の各施設の若手職員に原稿を依頼しました。題して「私にとって仕事のやりがいとは」。一人ひとりの思いが表れています。

第6回インド人権スタディツアーに参加して

◆ 報告 ◆

理事長 平田 純博



昨年7月の「第6回インド人権スタディツアー」に参加しました。これは「インドの身分制度の中で差別と貧困を余儀なくされている子どもたちに対して就学援助活動をおこなう」ことを目的としたもので、加島友愛会としては一昨年に続く参加となりました。

訪問先はタミルナード州にあるチェンナイ市。人口450万人の都市です。

ダリットの人々との交流

インドにはヒンズー教の身分制度（カースト）があります。このツアーは最下位とされる「不可触民」との交流を目的としています。

「不可触民」はダリット（抑圧された人々）と自称。ダリットへの差別は憲法で禁止されていますが、職業・結婚・居住など、社会生活全般にわたり厳しい現実・差別実態が存在しています。ダリットの人口は、約一億八千万人と推定されています。

今回の訪問では、農村部・都市部のダリット地区、と畜場、皮なめしや洗濯工場の見学などがありました。

ダリットが働く荷役・運搬、建設、食肉、皮革、清掃、再生資源、洗濯などは、日本の被差別部落民が従事し守ってきた産業・仕事と同じです。

インド政府と社会が何故これらの工場や産業、農業などに資本と技術をもっと投入しないのか、目覚ましい発展を遂げるインド経済をもってすれば困難なことではないはずです。

先輩に学びながら、長く部落解放運動や社会福祉事業に携わってきました一人として、義憤を感じざるをえません。

しかしながら、インドのことはインド人自らが起ち上がり改善していくことです。同じアジア人として見守るしかありません。



洗濯場

せん。

紀元前二六〇〇年に起こったインダス文明に始まるインド歴史の厚み、広大な国土と人口十二億人が、多様な民族・言語、宗教で構成されるインド社会、短い期間と限定された地域での視察・研修でしたが、少なからずカルチャーショックを受けました。



里子との出会い

日本から就学支援をしている里子たちにも、何回か会う機会がありました。そのうちの一人のシャランジ君は四年生、昨年友愛会がプレゼントしたスケッチブックに描いた作品や学校の通信簿を見せてく



スケッチブックに描いてくれた絵

れました。

他の子どもたちも通知表や絵画を持ってきて、日本からの参加者の前で一人ずつ発言（決意表明）をしてくれました。またこの就学援助によって中学校を卒業し、現在大学に進学している女性も出席し、里子たちを励ましていました。

今回の訪問でも昨年同様法人として子どもたちにスケッチブック・鉛筆など学用品を用意し、窓口となった弁護士（ダリット出身）をとおして直接手渡しました。

私たちの課題を考える

日本でも確かに部落差別をはじめ様々な人権問題は存在します。

部落差別に限って言うと、九十三歳になる私の父の時代は、劣悪な生活環境・差別教育実態・就職差別・結婚差別・あからさまに差別言辞や排除が当然のごとき社会でした。戦後に生まれ六十三歳になる私の時代は、基本的人権を保障する現憲法があるものの私が成人に達する頃、すなわち国が同和对策事業を始める昭和四十年代までは厳しい差別実態が存続していました。

しかし、私の世代の人たちからは、大学に進学し普通に就職し部落外の人との結婚



里子のジャヤスリちゃん

することが急速に増加してきており、息子はあからさまな差別を経験することなく生活できています。

部落解放運動とその力によって実施された同和事業の成果であり、高度経済成長期を経て経済的な豊かさ文化教育の発展を得た日本社会が背景にあると思います。

今日も差別により悲惨な生活にあるインドのダリットをはじめ世界の被差別人民や日本の障害者、東日本大震災で生命と生活基盤を失った人々たちへの支援が、差別と貧困の痛みをよく知っている私たちの今後の課題だと考えます。

スウェーデン福祉施設視察研修

かしま障害者センター

むつみ 胡麻 陽子

法人設立二十周年の取り組みのひとつとして、昨年九月五日〜十二日、スウェーデンの福祉施設視察研修に当法人から三名参加させていただきました。



高福祉高負担の国

スウェーデンは北欧にある人口約九百三十万人（日本の三分の一）の国です。スウェーデンといえは高福祉高負担がよく知られていますが、税金に関しては消費税が二十五％（食料品、交通費などは十二％、書籍や新聞などは六％）、地方税が三十％前後です。収入の半分は税金とということになります。それによって国民すべてが基本的な経済的安定を保証されています。福祉はもちろん、教育、医療、子育て、年金に関する費用はほぼ国の負担になっています。

福祉サービスを受ける場合には、まずニーズ判定員によって、その人の状況やニーズを聞き取り、必要なサービスを判定します。そしてその判定に応じた福祉サービスを利用者が選んで利用するという流れになります。高齢者や障害者であろうとすべての人々が市民であり、自分の義務、責任がある、できることとする、支援の目的は自立の為に同じ価値観があります。効率的にサービスを受けたり、サービスを提供することが出来るよう、住宅改修（スロープや手すり、リフト取付けなど）を行って補助器具やＴを使い、できるだけ在宅の中でサービスを受けられるようになっていて、地域福祉や地域医療が中心です。送迎サービスも充実しています。

環境整備と情報管理



サービスハウスの利用者と記念撮影

高齢者福祉施設ではナースイングホーム、デイケアセンター、サービスハウスを見学しました。入居型の施設では、それぞれの部屋というより家であるということを大切にしている、その人の今まで使ってきた家具やテーブルに囲まれて生活できるようなになっており、安心できる空間作りがされていました。また、人生歴の情報を本人や家族から詳しく得てケアに活かしており、人生の中で住む場所が変わった

だけと思わすことができるだけの、徹底した環境整備と情報管理がされていました。九十歳の女性が居室の見学を快く受けてくださったのですが、素敵な調度品にあふれ、自宅に招待されているという感じでした。ただし、身体機能に問題があり、また高齢であるため、居室内にナースコールがあるのはもちろん、腕時計式のナースコールも常時身に付けているので、安心して生活を送っていると話されました。

デイケアセンターでは、日本と違って入浴サービスはありません。移民の多いスウェーデンでは、それぞれ文化も違うので、それに合わせた食事やサービスを提供されていました。

国や市の経済状態によりサービスが変わるということにもなるので、みなさん政治にも高い関心をよせていました。職員は、ただ振り回されるのではなく、情勢の変化にもきちんと対応するなど高い意識をもっているとのことでした。

「障害」の認識のちがい

障害者福祉施設では、デイアクティビティセンターとグループホームを見学しました。

スウェーデンには入所施設はなく、自宅やグループホームで生活し、日中はデイアクティビティセンターを利用したり、パーソナルアシスタントやコンタクトパーソンという個別の支援サービスを使って外出したりして過ごします。

デイアクティビティセンターではいくつかのグループに分かれています。利用者一人ひとりのニーズに合わせた活動や支援が行われていました。利用者の労働組合のようなものがあり、代表者が集まっているところを実際に見学させていただきました。制度の勉強をしたり、施設をより良いものにしていくために話し合うのですが、みなさん活き活きとしていました。話し合いには施設の職員ではなく、市から派遣された第三者が入っていました。

グループホームは重い障害を持った人たちの所で、二十四時

間体制でした。個室は約四十五㎡と広く、トイレ・シャワー室・キッチンがあり、食事も各部屋で作って食べるそうです。すべてバリアフリーでリフトが準備され、てんかんを持つ人のベッドにはセンサーが付いていて、職員がすぐに対応できるようになっていました。自己決定が難しい人に対しては長い時間をかけて色々な事を試しながら少しでも選択ができるようサポートしていました。

スウェーデンでは、障害者手帳のようなものはなく、障害別に区別されることはありません。障害とは、個人とその個人を取り巻く環境によって発生するものと捉えられています。日常生活や社会生活を送る上での困難さの視点から「障害」が認識されるので、範囲がとても広く、障害とそうでないところの垣根が低いと感じました。



認知症デイサービスのデイルーム



障害者グループホーム

ノーマライゼーションの理念

文化の違いを感じたことは、男女平等という考えなので同性介助という概念はなく、異性を介助することはいたって普通だということでした。同性介助を希望する場合はそれを尊重し、中には配慮が必要なケースはあるようですが、基本的には男女ミックスだとのことでした。トイレも男性女性に分かれておらず、子どもの頃から、男女平等の教育や環境の中で育っていることを感じました。

介護職員はリフトの使用が義務づけられています。住宅改修を行ったり、様々な補助器具を使ったりすることは、利用者の自立や地域生活を推奨するだけ

でなく、介護する側のことも考えられていました。スウェーデンでも介護職員の社会的位置づけや給料は、決して高くはないようですが、安心して働くことが出来るため、離職率は低いようです。

各施設で様々な質問をしましたが、私たちは「ノーマライゼーションの考え方をもとに…」と話されることが多く、ノーマライゼーションの理念がしっかりと根付いていることを実感しました。特別なことよりも、利用者主体、権利を擁護するなどの基本的なことをひとつずつ忠実に実行するという原点を改めて学ばせていただいた研修でした。

☞インターネットサイト「オアシスナビ」にも掲載しておりますので是非一度ご覧ください。

平成24年4月1日開設



社会福祉法人 加島友愛会

介護付き有料老人ホーム

リュミエール加島



内覧会開催のご案内

開催日 3月19日(月) 20日(火) 21日(水) 22日(木)
23日(金) 24日(土) 25日(日)

開催時間 10:00~16:00

リュミエール 加島のご案内

リュミエール加島では

- ◎**健康管理サービス**……年2回の健康診断、嘱託医による健康相談など
- ◎**24時間体制の緊急対応サービス**……介護・看護スタッフによるセキュリティと見守り体制
- ◎**生活支援サービス**……自分らしい生活を維持継続できるようサポート
- ◎**介護サービス**…要支援・要介護を受けておられる方に最適な介護サービス計画書を作成
- ◎**レクリエーションサービス**……趣味、サークル活動、年間行事、映画鑑賞、コンサートなど
- ◎**食事サービス**……栄養士が作成した献立による食事の提供

を提供します。

交通案内

※JR東西線「加島」駅より北へ徒歩8分

※梅田・十三より市バス97号「神崎橋」「加島駅」行き、または阪急バス「加島駅」行きで「加島西」下車北へ徒歩3分

内覧会についてのご予約・お問い合わせは

フリーダイヤル 0120-087-322

メールアドレス lumiere@kashima-yuai.or.jp

社会福祉法人 加島友愛会

介護付き有料老人ホーム リュミエール加島 担当：江見

